



大和合金 注力分野の航空機用素材 20年販売量3割増目指す

銅合金の押出品・鋳合金(本社・東京都板橋区、社長・萩野源次郎氏)は2020暦年(1~12月)、注力分野の航空機用素材の販売数量を前年比で3割増を目指す。欧州顧客向けの販売増を見込むほか、国内顧客向けは高水準の供給量を維持したいと考えて。小ロットで供給できる小回りの良さなどを生かしながらビジネスのさらなる拡大を目指す。

同社ではアルミ青銅や高力黄銅でできた円筒形の鍛造・押出品である「ブッシュ」写真を航空機関連市場に納入。ランディングギアと呼ばれる着陸装置の軸受けの素材として用

いられている。

今年ドイツの顧客で受注拡大を見込むほか、フランスの顧客で認定の幅を広げ納められる製品の種類を増やしたことも販売増に貢献する見通し。さらに小ロット供給による使い勝手の良さに加えて、ポルトガルに開設した事務所を起点とした技術サービスを生かし、昨年に引き続き過去最高量の販売を目指す。

萩野社長は「新型コロナウイルスの影響で市場環境は不透明感を増しており需要にブレ

が、構造的に伸びる市場ではあるので販売を増やしていければ」と話している。19年の航空機向けの販売量は約1割増だった。

三芳合金工業

朝霞工場にロボドリル導入

ダイスのメンテナンス効率化

大和合金グループの三芳合金工業(本社・埼玉県三芳町、社長・萩野源次郎氏)は2020年内をめどに、朝霞工場(埼玉県新座市)にロボドリルを導入する。ロボドリルは切削や研磨などを自動で行う

設備。押出ダイスのメンテナンス作業には高い習熟度が必要で、現在は熟練工が汎用旋盤で形状を整えている。同社では将来的な人員不足を睨み自動化を進める。導入する設備は1度に6個のダイスをメンテナンスできるほか、夜間の無人での作業が可能となる。